「アフリカの瞳」　―帯木蓬生―　　’16.7.10　斉藤スミ子

帯木蓬生の本はこれで 3 冊目。どれも重量感があり、引き込まれて読んでしまう魅力がある。アフリカ‥エイズ・・、どちらも重そう？　他の本を先に読もうかな？？と思いつつ最初のページをパラパラ見ていると

「奴隷貿易が 300 年続き、2500 万人が連れ去られ、2500 万人が途中で死んでいき、残ったのが 5500 万人･･･」と衝撃的数字にそのまま読み進めてしまった。

作田信という日本人医師とその妻(アフリカ人)が果敢にエイズ予防薬の悪辣さを訴え、アフリカ人に希望を抱かせる取り組みも次々サークルのように育てていくのもすごいと思った。

作田も心臓医学のためにたまたま来たアフリカで、エイズの現実に出くわしそのままアフリカにいついて、のち妻となるパメラと出会う。彼女はアフリカとアフリカ人を救うために情熱をもち、兄はアパルトヘイトの抵抗運動で命を亡くしている。作田は妻のパメラがアフリカの人々に希望や光が見えると瞳がきらりと光る。そんなパメラにひかれたのだと思う。彼の生き方もすごいと思った。

二人の息子（タケシ）を日本人学校で日本語を学ばせたと願っていたが、「日本人の為の学校であると」断られてしまう。

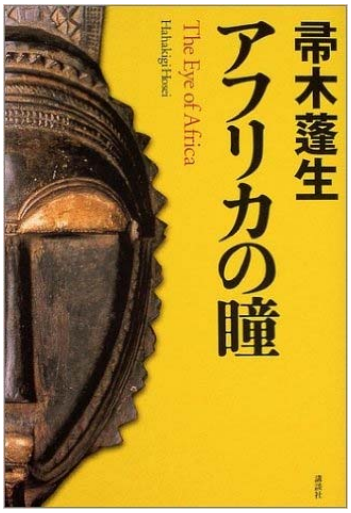
この本の中で驚いたのは

１・発展途上国援助のことである。　私は、これは国の無償無返却の援助でカンパみたいなものと思っていたが、なんと資本の売り込みであり、これは利息がありアフリカは莫大な利子を払わされていて、経済が立ち行かなくなっているという。援助でなく海外のビジネスのターゲットになっている。

２・世界の 3 分の 2 がアフリカに集中するというエイズもビジネスのターゲットになっていた。生活苦にあえぐアフリカ人は高い薬は買えない。ただで日当まで出すクリニックがある。実態は実態実験であることが暴露された。国や巨大な会社が黒幕として封じ込めに、あるいは隠ぺいに躍起である。

感じたことは

１・貧困の連鎖である。アメリカのリーマンショックも中流階級に家を買わせ年々吊り上がる利子を当て込みどちらも立ち行かなくなり、不動産不況となり・・。アメリカの兵役義務解除も貧困が生んだ産物だ。生活困窮者が沢山出て義務にしなくても兵役に就きたい人が集まってきた。このエイズ問題も根は同じだと思った。



帯木蓬生で思ったこと

帯木の知識は多岐にわたり大したものだと感嘆する。そして、単なる知識でなく、人のぬくもりを

感じる。知だけでは面白くないし、温かさだけも・・。これが両輪となって読者をほんの世界へとひっぱっていく。